

《研究ノート》

## 文化的自然主義とリベラルな自然主義の 系譜学的関連性

加 賀 裕 郎

### I.

英語圏の大半の哲学者は自然主義者である。しかし自然主義は多義的な語句である。広い意味で、自然主義は超自然的な存在を否定する思想である。もう少し限定すれば、自然主義は自然科学、とりわけ物理学の言語によって記述される存在だけが實在だと主張する。論理的には、第一階(the first order)の述語論理学によって記述される存在だけが實在だとされる。したがって例えば信念文(私は……だと信じる)や、様相文(……であることは必然的だ)などは、實在について述べた文ではない。様相、志向性、規範などは存在から消去されるべきだとされる。

このような厳格な自然主義は、パトナム(Hilary Putnam)が「形而上学的實在論」と呼んだものに等しい。この立場は視座に依存しない世界の存在と、それに対応する命題が存在し、そうした世界と命題の一義的な対応が真理と見なされる<sup>1)</sup>。

形而上学的實在論よりも柔軟な實在論もある。例えばウィリアムズ(Bernard Williams)の「世界という絶対的概念(the absolute conception of the world)」の考え方は、パースペクティブ的な世界——経験という視座を通して現れる世界——においても、真偽が成り立つと主張する<sup>2)</sup>。狭義の形而上学的實在論にとって、パースペクティブ的な世界における真偽は「～にとって真または偽」であるが、ウィリアムズは、そうした世界でも端的に真偽が成り立つという。例えば「草は緑色である」や「マチルダは貞節である」は真理値をもつ。

ウィリアムズは自らの立場を相対主義ではなく非客観主義と呼ぶ。非客観主義にとって、「草は緑色である」や「マチルダは貞節である」は真理値をもつが、「世界という絶対的概念」が導入された場合、事情が変わってくる。何故なら「草は緑色である」という、第二性質を含む文は、「世界という絶対的概念」の導入によって相対化されたとしても、色の分類への関心は生物学的に普遍的である。それに対して「マチルダは貞節である」のような価値語句を含んだ文は、「貞節」のような特定の文化に局限される概念を含むので、「草は緑色である」のような文よりもパースペクティブ性が強い。

パトナムの言う「形而上学的實在論」とかウィリアムズの「世界という絶対的概念」が伴立する自然主義には、人間の経験が介在する余地がないか、余地があるとしても派生的、副次的である。このような自然主義に対しては、いくつかの疑念が生じる。その一つはパトナムの形而上学的實在論批判に見ることができる。パトナムは科学的實在論とともに常識的實在論を支持する。常識的實在論を欠落させた科学的實在論の描く世界は単なる抽象物であろう。つまり科学的實在論と常識的實在論を共に含むような自然主義が、パトナムの目指すものである。

ジョンソン(Mark Johnson)は、心の哲学に関わって、パトナムと同様の主張をする。自然主義は科学的方法を受け入れるとともに、その方法を超えた独自の真理探究の方法を認めない。ただし問題は何を以て科学的方法とするかである。心の哲学に関する一つの立場は、心を神経生理学的言語に還元して捉えようとする。これは消去的唯物論に帰着する。それに対してジョンソンは、神経生理学的言語だけでなく、言語学、発達心理学、認知心理学、人類学、社会学を含む幅広い科学によって心を捉えようとする非還元主義的な自然主義の立場に立とうとする<sup>3)</sup>。

さらにハーバーマス(Jürgen Habermas)の「弱い自然主義(der schwache Naturalismus)」もまた、厳格な自然主義に異を唱える<sup>4)</sup>。ハーバーマスが厳格な自然主義者として挙げているのはクワイン(Willard O. V. Quine)である。クワインは経験的に進行する認識と、それについての規範的自己理解の差異を捨象し、認識論を経験的心理学に同化する。これに対してハーバーマスは進化論的自然主義と、世界と世界内的なものの超越論的差異を両立させようとする。これが「弱い自然主義」である。具体的には自然進化を生物の問題解決過程と捉え、その枠組みのうちで規範的自己理解、世界と世界内的なものの超越論的差異を維持しようとする。ハーバーマスの試みの成否については検討の余地があるとしても、その意図はパトナムやジョンソンと共通性をもつ非還元主義的な自然主義の確立にある。

我々はこれまで形而上学的實在論などの還元主義的自然主義に異議を唱える、いくつかの自然主義を概観してきた。その批判の骨子は、パトナムにとっては常識的實在論ないし経験的實在論の重要性、ジョンソンにとっては諸科学相互の還元不可能性、ハーバーマスにとっては進化論的自然主義と世界と世界内的なものの超越論的差異の両立可能性である。

プラグマティズムの視点から、英米圏の主流をなす厳格な自然主義に対して指摘すべき、もう一つの問題がある。それは厳格な自然主義における自然が、いわば「死せる自然」だということである。順を追って説明しよう。厳格な自然主義における自然は、物理学の言語によって記述される。この場合の物理学とは、形成途上にある物理学ではなく、完成された物理学であろう。しかし形成途上の物理学と完成された物理学を明確に区別することはできない。何故なら我々は完成された物理学を同定するための基準を持ち合わせていないからである。これはローティ(Richard Rorty)やデイヴィッドソン(Donald Davidson)が、正当化と真理を区別することができないと主張したことと同類である。今、正当化されている主張が単なる正当化なのか、真理なのかを見分ける術を、我々はもっていないのである。

百歩譲って、完成された物理学が存在するとしよう。それは自然を、既に完成されて目の前に横たわる客体として描くだろう。デューイは、そうした客体としての自然を「すべての個人的な指示、起源、視野から清められた非情緒的な知識、信念と独占的に結びついたもの」あるいは「純粹で認識的な対象、固定した関係のうちにある固定した諸要素の宇宙」(MW 3: 86)と呼ぶ。それは対象化された、死物としての自然である。

それに対してデューイはヘーゲルから「自ら展開しつつある生の運動」という實在概念を受け継いだ。厳格な自然主義における實在が、既に完成されて現前する死物であり、その認識者は、その實在の外部にいる傍観者である。それに対してデューイがヘーゲルから受け継いだ実

在は、「不確実性、疑わしさが実在に内属しているような世界、また個人的な態度と反応が、それ自体の判然とした存在において実在的であるのと同様、未だ未決定な実在の要因が、形、意味、価値、真理をもつ場合の唯一のあり方としても実在であるような世界」(MW 3:95)であった。実在は不確実性を内包した、形成途上にある動的な存在であり、人間はそうした存在の傍観者ではなく、形成途上にある実在の運動に、つねに既に巻き込まれ参加している。ただしヘーゲルは「自ら展開しつつある生の運動」を観念論的に「精神」として捉えたが、ポスト・ダーウィンのな哲学者であるデューイは、それを進化しつつある自然と捉えた。つまり「自ら展開しつつある生の運動」の主体は精神ではなく、進化しつつある自然である。

論者は、「人間もその一要因である進化しつつある自然」の自然主義を文化的自然主義(cultural naturalism)と規定して、これまで継続的に検討してきた<sup>5)</sup>。しかし英米圏の自然主義では、厳格な自然主義あるいは科学的実在論が主流であり、文化的自然主義あるいはプラグマティックな自然主義は、十分に注目されてこなかった。そのなかで、文化的自然主義の系譜に位置づけられるのがパトナムである。パトナムは初期の頃を除けば、常識的実在論と科学的実在論をともに含む実在論を一貫して追求した。このような実在論は、近年「リベラルな自然主義」と呼ばれるようになった。「リベラルな自然主義」と呼ぶことのできる自然主義者には、パトナムをはじめとして、マクダウェル(John MacDowell)、ストラウド(Barry Stroud)、デイヴィドソン、ストローソン(Peter F. Strawson)、スキャンロン(Tim Scanlon)などがある<sup>6)</sup>。彼らの全員がプラグマティックな自然主義者だというわけではないが、「リベラルな自然主義」を唱えているとすることができるだろう。ここで「リベラルな自然主義」の基本的主張は次の通りである。第一に考察の焦点が非人間的な自然から人間的な自然に移る。第二に規範に対する非還元主義。規範的なものは自然存在の一樣態として認められる。第三に第一哲学を認めないが、哲学を科学に還元する自然主義には反対する。第四に多元主義的な科学概念をもつ。つまり他の諸科学が終局的に還元されるような特権的科学は存在しない<sup>7)</sup>。

本論の課題は、ミードやデューイといった中期プラグマティストの文化的自然主義と、パトナムなどの展開するリベラルな自然主義との系譜学的関連性を論及することである。さらにこの目的のために、プラグマティックな自然主義の最新の研究成果の一つであるバーンスタイン(Richard Bernstein)の『プラグマティックな自然主義——ジョン・デューイの生ける遺産』を批判的に検討してみたい。

## Ⅱ.

最初に、「中期プラグマティズム」という概念から検討しよう。オーキシエア(Randal Auxier)は、パースやジェイムズの初期プラグマティズムに対して、ミードやデューイのプラグマティズムを中期プラグマティズムと呼び、その思想的特徴を「文化に基づく有機体論的な自然史の哲学」<sup>8)</sup>と規定する。この哲学は、本論では「文化的自然主義」と定式化される。文化的自然主義において文化と自然は「創造的緊張」のうちにある。創造的緊張とは、文化と自然が相互的、循環的——論理的ではなく、歴史的循環——関係のうちにあるということである。つまり文化は自然史の文化的位相であるとともに、人間は文化を通してのみ自然に接近できる。

中期プラグマティストは、この相互的、歴史的循環のうちに留まろうとする。

それに対してクワインなどの後期プラグマティストは、文化と自然の「創造的緊張」のうちに留まることなく、文化を自然に還元する機械論的自然主義の立場をとる。いっぽうローティは、文化と自然の関係を因果的關係に限定する。自然と文化は密接な因果關係にありながら、論理的には独立している。その結果、自然に関しては物理主義的な自然主義の立場をとるが、文化に関しては言語的観念論と言えるような見解をとる<sup>9)</sup>。ローティの立場は、文化と自然の創造的緊張のうちに留まろうとする文化的自然主義ではなく、物理主義的な自然主義とニーチェ的プラグマティズムの併存と呼べるようなものになる。

以上のように考えると、20世紀後半のリベラルな自然主義は、クワインやローティといった機械論的自然主義を経由して、中期プラグマティズムの文化的自然主義が復興したと解釈することはできないだろうか。前述したバーンスタインの研究は、我々の見解を補強するものだと見なされる。何故ならバーンスタインは、近年のリベラルな自然主義の復興を、「デューイのプラグマティックな自然主義の精神」<sup>10)</sup>の発展だと捉えるからである。そのうえでバーンスタインは、前述のパトナムを始めとして、セラーズ(Wilfrid Sellars)、キッチャー(Philip Kitcher)、ランバーク(Bjorn Ramberg)、ゴドフリー・スミス(Peter Godfrey-Smith)、プライス(Huw Price)、マッカーサー(David Macarthur)、ジョンソン(Mark Johnson)、シンクレア(Robert Sinclair)、レヴァイン(Steven Levine)、ルース(Joseph Rouse)等の名前を挙げ、彼らが「デューイのプラグマティックな自然主義のビジョンの、精細な明瞭化」<sup>11)</sup>に貢献していると言う。バーンスタインの主張は、どの程度の妥当性を有するのだろうか。以下では、バーンスタインが採り上げている何名かのリベラルな自然主義について検討し、バーンスタインの主張の妥当性ないし非妥当性について、我々の見解を確定したい。

### Ⅲ.

最初にマクダウェルのリベラルな自然主義を採り上げよう。マクダウェルが『心と世界』で扱った問題は、最小限の経験論を維持することは如何にして可能かということであった。何故なら信念や判断と世界との関係は、ローティやデイヴィッドソンが主張するような因果的關係ではなく、真か偽が問われる規範的關係であり、真か偽の判定基準は経験によって与えられるからである。つまり経験は信念や判断の真偽を判定する法廷である。しかしクワインの「経験主義の二つのドグマ」やセラーズの「経験主義と心の哲学」を知る現代の哲学は、古典的经验論のような前言語的な「未加工な感じ(raw feel)」とか、論理的経験主義の、理論言明から全く独立した観察言明を、真偽を判定する法廷に入れるわけにはいかない。

マクダウェルは、信念や判断の正当化が「自然の論理空間」ではなく「理由の論理空間」において行われるべきだと主張する。しかし、そうすると信念や判断の真偽を決定する経験は、つねに既に「理由の論理空間」のうちにることになり、認識行為が世界に対して応答する責任を負うことができなくなるのではないか。そうだとすれば、いっそのこと「理由の論理空間」を「自然の論理空間」に還元する「あからさまな自然主義(bald naturalism)」<sup>12)</sup>を採るべきだろうか。マクダウェルはこの考え方を採らず、もう一つの考え方、「我々の感官に対する世



界の印銘(impression)は既に概念内容を有している」を採る。つまり経験は世界からの印銘という点で受動的でありながら、同時に悟性が作用している点で能動的であり、こうした受動と能動の総合として経験的世界は実在する。

この立場はカント主義だと言える。それではマクダウェルはカント的な超越論的観念論者なのだろうか。マクダウェルの特徴は、この地点から自然主義に向かうことである。すなわち「理由の論理空間」はプラトンの離在的普遍ではなく、我々の習慣形成を通して形成された「第二の自然(the second nature)」<sup>13)</sup>である。マクダウェルの「第二の自然」という概念は、ヘーゲルとアリストテレスの影響を受けたものである。マクダウェルは「第二の自然」の形成過程を‘Bildung’として捉える。‘Bildung’とは「我々のような動物種が正常に成熟していくさいの一要素であり、意味は自然の外部からの神秘的な贈与ではない」<sup>14)</sup>。こうしてマクダウェルは、カント主義とアリストテレス主義の接合によって、信念や判断の真偽を判定する基準としての経験という立場を、自然主義的に維持しようとしたのである。

マクダウェルは自らの立場を「リベラルな自然主義」<sup>15)</sup>と呼ぶ。マクダウェルがデューイの自然主義に言及することはほとんどないが、バーンスタインは両者の思想には「実質的な重なり合い」<sup>16)</sup>があると言う。マクダウェルの立場は基本的にカント主義であるが、ヘーゲルのカント解釈の影響下で、カントをアリストテレス的自然主義と接合した。つまりマクダウェルはカントを自然化した。いっぽうデューイはヘーゲル主義者であるが、ヘーゲル自身が、カントを自然化していたと見なした。デューイの出発点はヘーゲル主義、マクダウェルの出発点はカント主義であるが、各々はヘーゲルやアリストテレスを介して、ともにカントを自然化したのである。その結果、デューイとマクダウェルにとって「理由の論理空間」は人間という動物種の成長の過程で形成された「第二の自然」となる。

「理由の論理空間」を「第二の自然」と見なす点で、デューイとマクダウェルの立場は基本的に一致する。ここで「第二の自然」について、デューイの視角から若干付言しておく。第一は「第二の自然」が「習慣」として捉えられることが重要である。習慣は有機体的要因と環境的要因の個別的な相互作用の繰り返しではなく、関係様式である。つまり習慣は生物が成熟する過程で獲得するものでありながら、関係様式としての恒常性、普遍性を兼ね備えている。第二に習慣には、いくつかの発展形態がある。低次の習慣は環境への受動的な順応や馴化である。それに対して環境の諸条件を主体のうちに取り込むような能動的な習慣がある。さらに創造性も習慣の一形態でありうる。例えばピアニストが、演奏の度に以前とは異なる演奏を心がけるとしよう。それはピアニストが、絶えず新しい演奏を心掛ける習慣を獲得していることを意味する。このように習慣は、生物学的な順応や馴化の延長線上にありながら、それとはまったく異なる芸術的な創造の習慣へと発展する可能性がある。第三に「第二の自然」が進化論的に捉えられることが重要である。何故なら進化論的生物学は、デミウルゴスのような世界の設計者がいなくとも、世界には設計があることを教えたからである。以上のように習慣論や進化論を組み込むことによって、「第二の自然」の自然主義は、「理由の論理空間を」説明できるようになる。

「第二の自然」の自然主義に関して、デューイとマクダウェルは一致する。しかしバーンス

タインは両者の違いに目を向ける。その違いはマクダウェルが、「理由の論理空間」を「第二の自然」の自然主義と規定した後に、この規定に基づく自然主義哲学を構築しないことから生じる。その理由は、「理由の論理空間」をどのように扱うべきかという近代哲学の問題が「第二の自然」の自然主義によって解消された以上、哲学的構築は不必要だと、マクダウェルが見なすからである。これはマクダウェルが、哲学の課題を「治療」に限定する「静寂主義(quietism)」の立場を採ることを意味する。それに対してデューイは、「第二の自然」の自然主義を含む自然主義的形而上学を構築した。ローティがデューイの形而上学を、デューイの哲学の余計な部分として否定したのと同様に<sup>17)</sup>、マクダウェルもデューイの形而上学を否定するように思われる。しかしリベラルな自然主義者のルースやゴドフリースミスは、逆にマクダウェルの静寂主義を問題にする。

マクダウェルからすれば、近代哲学の不安は、近代科学によって前提される自然概念が「理由の論理空間」を説明できないということから生じる。その不安と強迫観念が「第二の自然」の自然主義によって除去された以上、それ以外のプロジェクトを立ち上げる必要はない。しかしルースやゴドフリースミスは、「第二の自然」の自然主義の具体的展開——デューイの自然主義的形而上学に相当するもの——が必要だと主張する。マクダウェルの静寂主義は、彼の欠点だとされる。ゴドフリースミスは、マクダウェルを別の観点からも批判する。それはマクダウェルが近代科学を「法則領域」という枠組みのうちにある自然理解に還元することである<sup>18)</sup>。近代科学の本質が法則科学だというのは、悪しき本質主義であり、実際には近代科学は多様である<sup>19)</sup>。

バーンスタインは、マクダウェルの概念や概念的なものの理解の仕方を問題にする。マクダウェルにとって概念や概念的なものは、判断、推論ができる能力である。マクダウェルはカント主義的、セラーズ主義的である。しかし判断、推論の能力を概念や概念的なものと同一視すると、動物は判断や推論の能力をもたないので、動物は概念能力つまり「カントの自発性(Kantian spontaneity)」<sup>20)</sup>をもたないことになる。人間は知的であるが、動物は単に感覚的である。このような捉え方は人間と動物を峻別することになるが、バーンスタインによれば、それは経験的な見解ではなく、アプリアリな見解である。それに対してバーンスタインは、自然的諸存在の連続性を重視する。自然的諸存在の連続性の哲学は、ルースやゴドフリースミスに共通している。彼らの哲学はデューイの経験的自然主義の発展形態ではないかと、バーンスタインは解釈する<sup>21)</sup>。我われはバーンスタインの解釈に同意する。デューイの自然主義的形而上学は当時の入手可能な経験諸科学の成果を踏まえ、それらを総合したものだからである。

#### IV.

最後に我々は、デューイの自然主義形而上学の社会的な側面に光を当てて、現代のプラグマティズムに着目してみたい。デューイの自然主義的形而上学は、単なる哲学的な自然理論ではなく、民主主義と結びついている。例えばストウア(John J. Stuhr)は「デューイにとって、社会および政治哲学——形而上学でも認識論でもなく——が第一哲学である」<sup>22)</sup>と述べる。バーンスタインによれば、デューイの自然主義的形而上学の社会的側面を受け継いでいるのが、キッ

チャーである。キッチャーは、デューイの自然主義的形而上学を、「市井の人間が、その社会的、倫理的、政治的、美的経験、そして宗教的経験さえも啓発し、豊かにすることを可能にする経験と自然の概念を発展させるための基礎」<sup>23)</sup>と見なしているという。

キッチャーのデューイ解釈で興味深いのは、自然主義を内容自然主義(content naturalism)と方法自然主義(method naturalism)に区分し、デューイを後者の自然主義として同定していることである。ここで内容自然主義とは、哲学を改革するために自然科学の多様な領域の内容に向かうものである。それに対して方法自然主義とは、自然科学の成功にとって決定的に重要な科学的手続きのうちに、哲学を再構成するための手がかりを見るものである。

キッチャーの内容自然主義と方法自然主義と重なり合うと思われるのが、プライスの客体自然主義(object naturalism)と主体自然主義(subject naturalism)の区別である。

バーンスタインは、プライスの自然主義の考え方が、デューイの「多元主義的な、プラグマティックな自然主義」<sup>24)</sup>の伝統に連なるものだと主張する。興味深いのは、バーンスタインが、デューイとプライスを結びつけて解釈するために、20世紀前半のコーエン(Morris R. Cohen)とデューイの論争を採り上げていることである。この論争は1939年のアメリカ哲学会で行われたシンポジウムで展開された。その詳細は本論の課題を超えるが、バーンスタインの眼目は、このシンポジウムのなかで、实在論者のコーエンがデューイの立場を「人間中心的自然主義(anthropocentric naturalism)」と規定して批判したことにある。コーエンは、デューイの自然主義が「全宇宙を人間的な語句で記述」<sup>25)</sup>する擬人主義的なものだとして批判する。逆から言えばコーエンにとっての自然主義とは、宇宙を人間的視座から独立な語句で記述されるべきだとする立場、キッチャーの術語では内容自然主義の立場である。

コーエンの立場は、プライスの術語では客体自然主義である。客体自然主義とは、存在論的には、存在するものと科学的対象を同一視し、認識論的には真の知識を科学的知識と同一視する立場である。それに対して主体自然主義とは、哲学は科学が人間について語ること、つまり人間は自然の被造物であることを出発点にすべきであり、哲学の主張がこの出発点と矛盾する場合には、哲学は自らの主張を取り下げるべきだという立場である<sup>26)</sup>。

プライスによれば、主体自然主義は客体自然主義に優先する。何故なら客体自然主義は主体自然主義の視座の承認に依存するからである。また客体自然主義は主体自然主義の精査に耐えられない可能性がある。具体的には「位置づけ問題(placement problems)」<sup>27)</sup>と呼ばれるものが、客体自然主義の躓きの石である。「位置づけ問題」とは、もしすべての実在が自然的実在だとすれば、道徳的事実、数学的事実、意味事実等を自然的実在のどこに位置づけるべきかという問題である。客体自然主義は「位置づけ問題」をうまく解決できない。この問題を解決するための一つの方法は客体非自然主義(object nonnaturalism)を採用することである。この立場は、实在を非自然主義的語句で記述しようとする。

しかしプライスはこの方法を採用せず、主体自然主義を採用する。それでは主体自然主義を採用すれば、「位置づけ問題」はどのように解決されるのだろうか。主体自然主義から見ると、道徳的事実、数学的事実、意味事実等の位置づけ問題は、客体的自然におけるそれらの位置づけの問題ではなく、人間の多様な言語行動のあり方、つまり道徳、数学等々のボキャブラリーを使用した、

多様な言語行動の相関関係の問題である。プライスは表象主義的意味論を採らないので、多様な言語行動と客体的自然の表象関係は存在しない。そのうえでプライスは、多様な言語行動は相互に還元不可能だとする多元主義の立場を採る。

プライスの主体自然主義は、デューイの文化的自然主義とどのような関係にあるのだろうか。バーンスタインは、両者には深い関係性があると主張する。プライスは客体自然主義と客体非自然主義を採らない。確かにこの点ではデューイの文化的自然主義と同一である。しかし文化的自然主義と客体自然主義が同一の立場か否かについては、論者にはいっそうの検討が必要だと思われる。何故ならデューイにとって、主体と客体、有機体と環境は相即的でありトランザクショナルに関係するからである。

主体自然主義は「位置づけ問題」を、人間の言語行動ないし言語ゲームの多元性として捉える。いっぽうデューイの文化的自然主義は「位置づけ問題」を探求の多元性として捉える。バーンスタインが指摘するように、「位置づけ問題」の多元主義的把握という点では、デューイとプライスの間に一定の関連性を認めることができる。

## V.

これまでの考察を纏めよう。20世紀以降の英米哲学の大半は自然主義に分類される。そして主流の自然主義は科学的实在論、形而上学的实在論、あるいはプライスの術語では客体自然主義である。しかしプラグマティズムの自然主義、とくにミードやデューイといった中期プラグマティストの自然主義は、文化と自然の創造的緊張、つまり文化と自然の相互制約的、循環的關係のうちに留まる自然主義、端的には文化的自然主義である。しかし中期プラグマティズム以降のプラグマティズムでは、機械論的自然主義が主流を占めるようになった。

他方20世紀後半になると、パトナムに代表されるリベラルな自然主義が台頭してきた。この自然主義にはハーバーマスの「弱い自然主義」を含めることができるだろう。本論の仮説は、リベラルな自然主義、あるいは弱い自然主義と呼ばれる立場がデューイの文化的自然主義と系譜学的関連性があるのではないか、ということである。最近、刊行されたバーンスタインの『プラグマティックな自然主義——ジョン・デューイの生ける遺産』は、まさに論者の仮説と同一の立場から、デューイの自然主義と、パトナム以降のリベラルな自然主義に思想的関連性を認めている。バーンスタインは多くの現代哲学者について考察しているが、本稿ではマクダウェルの「第二の自然」の自然主義を起点に、パトナム、マクダウェル、キッチャー、ゴドフリー・スミス、プライスの自然主義を検討し、文化的自然主義と現代のリベラルな自然主義の系譜学的関連性を確認した。その結果、マクダウェルの静寂主義やプライスの主体自然主義が文化的自然主義と、どの程度関連性があるかは、さらに検討されるべき問題だと結論づけられた。しかしマクダウェルの「第二の自然」の自然主義は、自然主義と規範性の関係に、デューイが強調した連続性を導入することに成功したと判断される。我われはバーンスタインの以下のような認識を共有するとともに、文化的自然主義とリベラルな自然主義の関係について、さらに検討したいと考える。すなわち「私 [バーンスタイン] の主要なテーゼは、ゴドフリー・スミス、プライス、ルース、さらに他の多くの人々による最近の仕事が、自然と規範の二元論



を含む、伝統的哲学の多くを悩ませてきた二元論を克服する、デューイの哲学的自然主義の精神に近づきつつある、ということである。これは科学的探究の新たな形態からの学習に開かれたプラグマティックな自然主義である」<sup>28)</sup>。

*The Middle Works of John Dewey: 1899–1925*, ed. by Jo Ann Boydston, Southern Illinois University Press, 1976–1983からの引用は、MW と略記し、巻数、頁数とともに本文中に記す。

## 注

- 1) Cf. Hilary Putnam, *The Many Faces of Realism*, Open Court, 1987, Lecture 1.
- 2) Cf. Bernard Williams, *Ethics and the Limits of Philosophy*, Harvard University Press, 1985, p. 132 ff.
- 3) Cf. Mark Johnson, “Cognitive Science”, *A Companion to Pragmatism*, ed. by J. R. Shook and Joseph Margolis, Blackwell, 2006, pp. 370–371.
- 4) Cf. Jürgen Habermas, *Wahrheit und Rechtfertigung: Philosophische Aufsätze*, Suhrkamp, 1999, S. 32 ff.
- 5) 自然主義に関する主な拙著・拙論は以下の通りである。「自然主義的プラグマティズムの展開」『理想』669号、理想社、2002年／「自然主義的实在論と現代プラグマティズム」『日本デューイ学会紀要』第46号、2005年／『デューイ自然主義の生成と構造』晃洋書房、2009年／「EmpfindungからErfahrungへ——文化的自然主義のほうへ」『日本デューイ学会紀要』第56号、2015年／「存在論——自然主義を中心に」『プラグマティズムを学ぶ人のために』（加賀裕郎・高頭直樹・新茂之編）世界思想社、2017年／「文化的自然主義の教育思想」『教育哲学のデューイ』（田中智志編）東信堂、2018年。
- 6) H. Putnam, *Naturalism, Realism, and Normativity*, ed. by Mario De Caro, Harvard University Press, 2016, p. 9.
- 7) H. Putnam, *Philosophy in an Age of Science*, ed. by Mario De Caro and David Macarthur, Harvard University Press, 2012, pp. 16–17.
- 8) Randal Auxier, “The Decline of Evolutionary Naturalism in Later Pragmatism”, *From Progressivism to Postmodernism*, ed. by R. Hollinger and De Depew, Prager, 1995, p. 182.
- 9) R. Rorty, “Non-reductive Physicalism”, *Objectivity, Relativism, and Truth (Philosophical Papers, Vol. 1)*, Cambridge University Press, 1991, pp. 113–125.
- 10) R. J. Bernstein, *Pragmatic Naturalism: John Dewey’s Living Legacy*, Graduate Faculty Philosophy Journal, 2020. バーンスタインは長年、ニューヨークにある The New School for Social Research で教鞭をとってきたが、同学校は2019年に創立百周年を迎えた。それを記念した雑誌が刊行された。本書は同雑誌にバーンスタインが寄稿した論文を基礎としている。The New School for Social Research はデューイが創立者の一人となった教育研究機関である。こうした点からバーンスタインは、創立百周年の記念号にデューイ研究の論稿を掲載したものと推察される。
- 11) *Ibid.*, p. 1.
- 12) J. McDowell, *Mind and the World*, Harvard University Press, 1996, p. 67.
- 13) *Ibid.*, p. 84.
- 14) *Ibid.*, p. 88.
- 15) McDowell, “Naturalism in the Philosophy of Mind”, *Naturalism in Question*, ed. by Mario De Caro and David Macarthur, Harvard University Press, 2004, p. 95.
- 16) R. J. Bernstein, *Pragmatic Naturalism*, p. 31.
- 17) R. Rorty, *Consequences of Pragmatism*, University of Minnesota Press, 1982, Chapter 5.
- 18) Cf. R. J. Bernstein, *op. cit.*, p. 34.
- 19) Cf. P. Godfrey-Smith, “Dewey, Continuity, and McDowell”, *Naturalism and Normativity*, ed. by M. D. Caro

and D. Macarthur, Columbia University Press, 2010, p. 316. / J. Rouse, *Articulating the World: Conceptual Understanding and the Scientific Image*, University of Chicago Press, 2015, p. 13.

20) R. J. Bernstein, *op. cit.*, p. 36.

21) *Ibid.* p. 37.

22) J. J. Stuhr, "Dewey's Social and Political Philosophy", *Reading Dewey: Interpretation for a Postmodern Generation*, ed. by Larry Hickman, Indiana University Press, 1998, p. 85.

23) R. J. Bernstein, *op. cit.*, p. 41.

24) *Ibid.* p. 45.

25) M. R. Cohen, "Some Difficulties in Dewey's Anthropocentric Naturalism", *Philosophical Review*, Vol. XLIX, 1940, p. 201。なおこのシンポジウムの詳細については、拙著『デューイ自然主義の生成と構造』、354頁-358頁を参照のこと。

26) H. Price, *Naturalism without Mirrors*, Oxford University Press, 2011。なお以下の記述は、拙論「存在論——自然主義を中心に」『プラグマティズムを学ぶ人とのために』、198頁-199頁に負う。

27) *Ibid.* p. 6.

28) R. J. Bernstein, *op. cit.*, p. 57.